

profile

たかみざわ・ゆり ●1978(昭和53)年、長野県生まれ。大学では生活科学部で栄養学などを学び、管理栄養士の資格を取得。卒業後は店舗企画職として働きながら二級建築士の資格を取る。飛鳥建設株式会社入社後は、現場支援、広報などを経て、2018年より現職の財務企画部に所属。



高見澤は仕事でも休憩中も変わらない表情で笑い続けてくれる。

「ポストに入っている、不動産のチラシ。あれのイメージイラストや間取り図を見るのが大好きな子どもでした。仕事で設計士の方と話をするうちに、あの夢を叶えてみたいという気持ちになっていって。思い切って、働きながら夜間の建築系専門学校へ通うことにしたんです」  
高見澤が目指したのは、働きながら二級建築士の資格を取得すること。それまで勤めていた会社は退職し、時間の融通が利く派遣社員という形態に切り替えた。昼間は仕事、夜は専門学校と、二足のわらじを履く毎日だった。そして

働きながら二級建築士を目指す

事業やプロジェクトを進めるには資金が必要で、その資金の計画・管理を担う業務も欠かせない。現場にスポットライトが当たりがちな建設業だが、このような事務方の仕事も、組織全体を支える非常に重要な役割を担っている。財務企画部の高見澤有里さんに、お話を伺った。

「ポストに入っている、不動産のチラシ。あれのイメージイラストや間取り図を見るのが大好きな子どもでした。仕事で設計士の方と話をするうちに、あの夢を叶えてみたいという気持ちになっていって。思い切って、働きながら夜間の建築系専門学校へ通うことにしたんです」  
高見澤が目指したのは、働きながら二級建築士の資格を取得すること。それまで勤めていた会社は退職し、時間の融通が利く派遣社員という形態に切り替えた。昼間は仕事、夜は専門学校と、二足のわらじを履く毎日だった。そして  
当時、高見澤が派遣されていたのが、現在も勤務している飛鳥建設株式会社だ。一人一歩努力をしたかきもあって、二級建築士の資格試験に見事合格。その後は建築士としての設計事務所へ働き、就職活動をする予定だった。しかし彼女は、大きく方向転換をする。設計事務所を探すのではなく、派遣先だった飛鳥建設の正社員になるための登用試験を受けることにしたのだ。「周りの人たちの空気が本当に私に合っていたし、風通しの良さも心地よく感じたんですね」  
元々やりたかったこととは、少しだけ違うのかも。でも、資格はきつと生かせるし、飛鳥建設でもっとやってみたい仕事もありそうだった。何より自分にとって居心地の良い環境と仲間の存在を感じていたのだ。  
登用試験に合格してからは、一般職としてアシスタント業務を担当。またその一年後には総合職への転換試験にも合格し、支店管理部での現場支援業務や本社広報などを幅広く経験した。そして現在の高見澤は企画本部の財務企画部に所属し、財務企画の業務を担っている。  
財務企画という仕事は、いわば、会社全体のお金の流れを設計すること。あらゆる部署と連携し、どの事業にどれだけの資金が必要なのか、

資金がなければ会社は何もできない

輝け! けんせつ小町

財務企画

高見澤有里

飛鳥建設株式会社  
企画本部 財務企画部 担当課長



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

my Beginning

私が建設業に入った理由

幼い頃の夢を、もう一度



上/飛鳥建設が行う社内運動会。多くの社員やその家族たちが参加する。(写真提供: 飛鳥建設(株))  
下/運動会では、業務中とは違った交流がある。同僚の家族とも顔を合わせることのできる貴重な時間だ。(写真提供: 飛鳥建設(株))  
左/仕事後には急いで保育園へ向かう。お迎え時には子どもたちの笑顔がはじける。大事なコミュニケーションの時間だ。



金融機関への訪問機会は多い。上司とふたり、要点を整理しながらアポイント先へ。

# my Growing

私が建設業界で学んだこと

## 助け合いは「大事なこと」の共有から

社内ではその時々でどういったお金の流れが生まれているのかなどを把握。これらを踏まえて資金計画を立て、金融機関から資金調達する。会社の将来を見据え、未来のためのキャッシュフローを生み出すことを考え、先導してゆく役割を担う。会社というものは資金がなければ動かない。組織の土台をつくる仕事であり、高見澤自身も、会社の経営に直結する仕事に強くやりがいを感じているようだ。

「私の仕事次第で、何億円という資金が動く。書類や資料の作成も、金融機関との交渉も、すべてこの会社を代表している仕事であり、とても責任のあるものだと感じています」

### みんなの「ライフ」はみんなのチームワークで守る

財務企画部で活躍する一方、高見澤は二度の産休・育休も経験している。いずれも復職後は、フルタイム勤務。時短勤務などへの勤務形態の変更はしなかった。高見澤より先輩の女性社員には、保育園が見つからないなどの理由でうまく復帰できなかった社員もいたようだが、幸いにも保育園への入園も決定し、彼女はあまり悩むことなく、フルタイムでの復帰を決めた。「やっぱり自分の『仕事したい』って気持ちは、大事にしたかったんですね」と振り返る。「ワーク」と「ライフ」、両立できるかと迷うのではなく、やると決めてから、どうすればできるかを

考えるのが高見澤らしきなのかもしれない。

更に彼女は続ける。みんながやりたいことをやっていくために必要なのは、お互いに支え合う組織としての力だと言う。「保育園の受け入れをもっと拡大してほしいとか、企業としては、男女ともに子育てがしやすい制度を整備しなきゃとか。そういうのも、もちろん必要です。だけど、それってもう大前提じゃないですか」

高見澤が強調するのは、制度だけではなく、「本当に困ったときの受け入れ体制」だ。例えば、子どもが小さいときは、熱を出して保育園から呼び出しの電話が掛かってくることもある。そういった緊急時に、社内では周りのメンバーにどれだけ業務のサポートをしてもらえるか。家庭内では家事・子育ての分担などでどれだけ協力し合えるか。育児に限らず、各人の体調不良や介護など、みんな考えなければならぬ課題はたくさんあり、それらを協力してみんなが乗り越えることができるのが、強い組織だ。会社も運動会などのイベントを開催するなど、支え合える組織の地盤づくりに取り組む。

「『どうしよう!』ってなったそのときに、どれだけみんなで助け合えるかっていうことが大事だと思うんです。会社でも、家族でも、同じように必要なことだと思います」

### 「大事なこと」を忘れないように

ワークとライフのバランスをとる、高見澤な



髙田財務企画部長(右から2人目)からも「成長意欲や目標達成意欲が高い」との評価。その時々で自らミッションを見つけ、取り組んでいる。

### my style

ウィークデイは慌ただしく過ぎてしまいますが、休日はリフレッシュしています。アウトドア好きなので、季節の良い時期は気の置けない仲間たちとキャンプやバーベキューをし、緑いっぱいの自然の中で水遊びをしたり美味しいものを食べたりして、月曜日から頑張る元気を新たにチャージしています。



道志川の溪流沿いにあるキャンプ場にて。

りの秘訣を聞くと、彼女は「家族の『核』を決めることです」とまっすぐに答えてくれた。何らかの課題が突然迫ってきたとき、その場で即座に決断することは難しい。大切なのは、そういった場面をあらかじめ想定し、普段から家族で話し合い、みんなにとっての「大事なこと」を決めて、同じ方向を向いておくこと。そうすれば、ワークとライフのバランスをとるための判断基準は自然と明確になるといえる。やりたいことを追い掛け続け、だからといって他の何かを諦めてきたわけではない高見澤だからこそ言える信念がにじむ言葉だ。自身の「核」を大切にしながら、彼女は今日もフルタイムで働いている。

**my Growing** 私が建設業界で学んだこと